

# 短歌を楽しむ

梧桐 学

## 短歌とは

- 音節(シラブル)が原則として五・七・五・七・七の五句31音からなる、日本古来の定型短詩。元は長歌に対する反歌(和歌)
- 千三百―千五百年の歴史
- 知られる最古の和歌は……  
古事記の中の須佐之男命歌
- 「八雲立つ出雲八重垣妻籠みに八重垣作るその八重垣を」

## 短歌の楽しさ、効用、他 愈いづくままに並べてみました

- 頭が活性化する。
  - 詩を創作し、読む楽しさが得られる。
  - 勉強するようになる。知識が増える。
  - 言葉(語彙)が増える。言葉を大切にするようになる(言葉への愛着が増す)。
  - 周辺(自然、家庭生活等)の観察が細かくなる。また、深くなる。
  - 精神世界が広がり豊かになる。
  - 情緒、感受性が豊かになる。
  - 物事の本質を衝く能力が増す。
  - 物事に対して思慮深くなる。
  - 家人、人一般、動植物一般に対して愛情が深くなる。
  - 考えを纏める能力が増す。
  - 要点を抽出、又表現する能力が増す。(簡潔にして要領の良い文)
  - 散文の表現力が増す。上手くなる。
- 短歌の記録性

## 短歌の構造

- 基本＝五・七・五・七・七の31音。
- 第一句(初句)、第二句、第三句、以上、上三句(第四句、第五句(結句))、下二句。
- 字余りと字足らず。繰返し。破調。効用と弊害。
- 三十一音を一息に詠む場合(理想)。例  
『逃げ水の透き影逃げてゆくを追ひアクセル踏めば車軸がきしむ』(第一歌集「白幻」)  
各句で一旦切る場合。の例
- 掬ひけり 白根火山の火口湖の硫黄に淡く濁るさ水を「(二句切れ)」  
「はった跳ぶ音ひびきけり うち見れば芝生地帯に秋の日たけて」(二句切れ)  
「無目的なる歩みをとどめたり 道に死にゐる頬白の前」(三句切れ)  
「帰宅時の車窓にはしる幾閃の雷光さびし 半戒を思へ」(四句切れ)
- 句跨り(一語が二句に跨る場合)例

『真夜にして新興宗教教団の館の凄慈雨に濡れたり』

- 句割れ(ひと句が割れる場合)例

『白天の神の声を遠退きてやがてなんにも聞えず 孤り』

## 短歌の詠み方

- ・生(せい)なま(の)感動を詠む。理屈や説明ではなく感動を伝える。(無数の種類の感動)
- ・初めの内は、とにかく思ったことを定型韻律に纏める。(また、既成の短歌を読む。)
- ・新たな発見を新しい表現で。
- ・何(とんな事)を詠むのか、考えを纏める。
- ・主題に焦点を当てて詠む。それが引き立つような語の幹旋、修辞。
- ・叙情(抒情)か叙事か。ともに短歌になる。
- ・不易(感動の普遍性)と流行(時代の証言)。
- ・読者に作者の意図がよく解かるように詠む。
- ・定型を活かす。語感(音感)良く、語の調べ良く、詩情と余韻と。漢字と仮名の配分。
- ・文語旧仮名か、口語新仮名か。一首で統一。
- ・写生・白常詠 喜怒哀楽・心理 写生+心理 恋愛 自己表現 述懐 境涯詠 時事 人事、
- ・比喩(暗喩、直喩、) オノマトペ(擬音語) 擬人化 古典や科学等あらゆる知識の活用。
- ・創造力と想像力。語彙、知識の修得。

## 短歌と俳句

- ・五七五七七 と 五七五。 七五調 。

日本語の工キスとしての定型短詩。

- ・俳句 連歌の発句が独立したものと。江戸中期。語数が少ないので一見簡単に詠めそう。しかし、省略の技法、言外に多くの意味を持たせる工夫を要する。主題を一層的に抽出し表現せねばならない。余計な感傷を排除し、言葉を殺ぎ落とすから、枯れた(乾いた)感じになる。季語など約束事が多い。歳時記片手にといつことになる。
- ・短歌 語数が多い分、俳句よりは表現にゆとりが持てる。かといって、言い過ぎるほど語数はない。潤いのある情感がより表現できる。比較的、湿っぽい感じとなる。約束事がほとんどない。非対称な音数の配置が絶妙な韻律の美しさを醸し出す。(活かすべき特性)

(歴史を辿ってみましょう)

## 主な古歌集

- ・万葉集(七五九頃)奈良時代・家持
- ・古今集(古今和歌集・九〇五)平安時代・紀貫之
- ・新古今集(新古今和歌集・一一〇四)鎌倉時代・定家ら
- ・八代集(八勅撰和歌集) 古今、後撰、拾遺、後拾遺、金葉、詩花、千載、新古今。 新勅撰)、山家集、金槐和歌集等の後、 実質的な長い空白 明治以降の近代短歌へ

例歌

- 「あしひきの山川の瀬の鳴るなへに」月が岳に雲立ち渡る「人麻呂 万葉集 卷7・1088」
- 「霞たち木の芽もはるの雪ふれば花なき里も花ぞ散りける」貫之（古今集）
- 「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」定家（新古今集）
- 「桐つゆ雨にしをれて散る花の惜しき心を何にたとへむ」西行（山家集）

明治（昭和（戦前））

- 根岸短歌会 馬酔木ー正岡子規他  
（古今の否定と万葉の称揚 写生歌）  
『瓶にさす藤の花ぶさみじかければたたみの上にどどがざりけり』子規  
アララギ 伊藤左千夫他  
「どりどりの色あはれなる秋草の花をゆすりて風ふきわたる」左千夫

長塚節・島木赤彦・斎藤茂吉・土屋文明・ニヶ島霞子・五味保義・柴生田稔・吉田正俊・小暮政次 他

「死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞こゆる」茂吉

「終りなき時に入らんにつかの間のあとさきありやありて悲しむ」文明

明星（派）

- 与謝野鉄幹（「采花集」他）  
「いたづらに何をか言はむ事はただこの太刀にありただこの太刀に」

• 与謝野晶子（「乱れ髪」他）

「清水へ祇園をよぎる櫻月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき」

• 石川啄木（「一握の砂」他）

「いのちなき砂のかなしさをよさざらざらと握れば指のあひだより落つ」

• 北原白秋（「桐の花」他）

「君かす朝の舗石さくさくと雪よ林檎の香の」とくふれ」

• 吉井勇（「酒ほがひ」他）

「かにかくに祇園は恋し寝るときも枕の下を水の流るる」

その他の歌人たち

• 若山牧水（「海の声」他）

「海風は君が身体に吹き入りぬ今宵いだかばいかにすすしき」

• 吉野秀雄（「寒蝉集」他）

「これやこの一期のいのち炎立ちせよと迫りし吾妹よ吾妹」

• 会津八一（「南京新唱」他）

「いかるがのさとのをとめはよもすがらきぬはたおれりあきちかみかも」

• 窪田空穂（「去年の雪」他）

「路のべに枯るる八千ぐさ己がじし実をこぼしめる寒きひかりに」

• 釈迢空 折口信夫。海やまのあひだ」他）

葛の花踏みしだかれて色あたらしこの山道をゆきし人あり」  
 ・尾上柴舟、前田夕暮、太田水穂、……、  
 そして現代へ……多数の短歌結社あり。

・齋藤茂吉

『最上川逆白波の立つまでに吹雪く夕べとなりけるかも』

・宮柾二(「ヌモス」創刊)

・佐藤佐太郎(「立房」他)

『冬山の青岸渡寺の庭にいでて風にかたむく那智の滝みゆ』

・近藤芳美(「命運」他)

・塚本邦雄(「水葬物語」他「前衛」)

『日本脱出したし皇帝ペンギンも皇帝ペンギン飼育係りも』

・寺山修二(「チホフ祭」他)

『「き母の真赤な櫛で梳きやれば山鳩の羽毛抜けやまぬなり』

・斎藤史、中条ふみ子、馬場あき子、……

宮柾二と「ヌモス」同人

『たまごまに見る夢ありてそのひとつ馬の蹄を洗ひやりぬき』(「多く夜の歌」昭31)より)

・野村清、初井しづえ、宮英子、葛原繁、鈴木秀夫、中山礼二、伊藤麟、

田谷鋭、今村寛、安立スハル、三木アヤ、山崎孝子、千頭泰、

藤重静子、川辺古一、平松茂男、関口福衛、仲宗角、杜沢光一郎、

高野公彦、柏崎驍二(河野裕子)、武田弘之、山本清、仰木香織、

小島ゆかり、(松平盟子)、久葉堯、池戸愛子、下鳥ふみ世、……

宮柾二の生涯、他

・大正元年8月23日、新潟県北魚沼郡堀之内町「丸末書店」の長男として生まれる。本名は肇。中学時代から歌を詠み、相場御風主宰の「木陰歌集」にも投稿。

・20歳の時、家運の衰退と失恋から上京する。仕事を転々とするうち昭和8年北原白秋を訪ね、秘書を勤めるようになる。歌誌「多摩」編集などに助力。昭和14年就職後すぐに応召され、中国山西省で足掛け5年、兵士として過ごす。師白秋の死、英子との結婚を経て敗戦を迎えた。

・昭和21年処女歌集「群鷄」を刊行し、歌誌「ヌモス」を創刊する。昭和35年父親の死の翌年、会社を依願退職し、歌に専念するようになる。生涯で13冊の歌集を刊行し、宮中歌会始の他、新聞雑誌歌壇の選者をする。昭和52年に日本藝術院賞を受賞、昭和58年には同会員に推挙された。

・一方で病を患い、入退院を繰り返しながら、昭和61年12月11日東京三鷹の自宅で、急性心不全のため74歳の生涯を閉じた。(故郷に「宮柾二記念館」あり)

・柾二の歌には、故郷魚沼の風土四季が色濃く映され、人生の孤独をひたすら見つめて得られた愛の魂が流れている。

・「群鷄」など初期作品は、白秋に「瘤を撫でるよつな」と評され、その独特の詩情でいち早く認められた。

宮柾二の短歌例

・群鶏(昭和10〜14年・23・27)第一歌集

「目にまもりただに坐(ゐ)るなり仕事場にたまる胡粉の白き塵の層(かさ)」  
「金粉の舞ひいちじろぎ陽を見れば疲れたるらし目にいたく沁みぬ」  
「目瞑りてひたぶるにありきほひつゝ憑みし汝はすでに人の妻」  
「鞍おかぬ軍馬が背の朝かげや水のこと見ゆ林の中に」  
「朝のひかり既に浴びつゝ目覚むる時早や混沌と一口ぞある」  
「病みまして静けくいます先生をつつしみ仰ぐ弟子なれば我は」  
「暗しよと一日の果の風聴きておはしましける眼交を去らず」  
「すかんぼの蓬(ほほ)ける頃と思ひをり鶏は羽の艶よろじまぬ」  
「日陰より日の照る方に群鶏の数多き脚步みてゆくも」  
「群鶏の数を離れて風中に一羽立つ鶏の眼ぞ澄める」  
「小走りに鳥屋いでて来し鶏が日向の寄りに歩み直せし」  
「つき放されし貨車が夕光(ゆふかげ)に走りつゝ寂しきままでどこどまらずけり」

『山西省』(昭14〜18)ノ27・31)第一歌集

「朝夕に空茜してしづけきを誰にかは告げむ征つ口ぞ近き」  
「短気に死ぬなと言らして色冷やき蟲除網戸にみ眼やりましき」  
「波の間に降り込む雪の色呑みて玄海の灘今宵荒れたり」  
「淒しく風乾きある夜の山をわれら越えつゝ汗みどろなる」  
「たたかひの最中静もる時ありて庭鳥啼けりおそろしく寂し」  
「敵弾が崩しそめたる崖下を次ぎて駆け抜く提銃にして」  
「おそろくは知らるるなけむ一兵の生きの有様をまつぶさに遂げむ」  
「石家庄をしきり南下する匪隊あり青便衣にして騎隊を混ゆと」  
「ねむりをる體の上を夜の獣穢れてとほれり通らしめつゝ」  
「ひきよせて寄り添ふごとく刺ししかば聲も立てなくくづをれて伏す」  
「麥の秀を射ち雑ぎて弾丸の来るがゆゑ汗流しつゝ我等匍ひゆく」  
「胸元に銃剣受けし捕虜二人青深峪に姿を吞まる」  
「おろそかにものを言ふとぞ軍用電話切りて歩めどもとな霜土」  
「からくして汗を拭きけり天の門の夜の霜風よ山西か此處は」

その他の歌集より

小紺珠・昭20・23(33・36)第三歌集

「河原来てひとり踏み立つ午どきの風落ちしかば砂のしづまり」  
「めぐりたる岩の片かけ暗くして湧き清水ひとつ日暮れのこと」  
「焼跡に溜れる水と葦草そを圍りつゝただよふ不安」  
「孤獨なる姿惜しみて吊し經し鹽鮭も今日ひきおろすかな」  
「一本の蠟燃しつゝ妻も吾も暗き泉を聴くことくぬる」

晩夏・昭23・25(36・38)第四歌集

「たたかひに一個小隊やうやくに食みて生けりし藜見て立つ」  
「犬ゆきて後行くものなき原に寒き時雨は音たてて降る」

日本挽歌 昭25・28(38・41)第五歌集

「七階に空ゆく雁のこゑきこえ」  
「三人子をつぎつぎと呼び圍らせばけづるがにきよし妻なれど母  
群れる蚪蚪の卵に春日さす生まれたければ生まれてみよ」  
「かなしくて多摩解散に觸れてきし墓前祭詞を讀む低き聲」  
「竹群に朝の百舌鳥鳴きいのち深し厨にしらく冬の鹽」  
「決したる心に揺らぐ寂しさを孤のものと我は堪へたり」  
「蠟燭の長き炎のかがやきて揺れたるとき若き代過ぎぬ」

多く夜の歌 昭28・35(41・48)第六歌集

「表現は生の警爲につながると我はしも言へり」  
「悲しみを耐へたへきて某夜せしわが號泣は妻が見しのみ」  
「かがやかに金の朝日は射しとほり日の棲所なる冬の竹群」  
「厨より炭切る音のひびききて潮のこゝし新しき年」  
「南に道ひらけつべル角光はすべて垂直に立し」  
「新しき具體のひとつ例ふれば国連加入の年あらたまる」  
「退職の願容れられ晴れ晴れとせる顔としも寄りゆけば言ふ」  
「青春を晩年にわが生きゆかん離々たる中年の泪を蔵す」

藤棚の下の小室 昭36・40(49・53)第七歌集

「よき言葉人より聞けばあたらしき代のよろこびに會へる心地す」  
「空ひびき土ひびきして吹雪する寂しき國ぞわが生まれぐに」  
「道の邊に避けむとしたりくれなぬに渦巻けることき林檎の皮」  
「花終へし白き牡丹は下土に豊かにし積む白き花瓣を」  
「硼酸で目を洗ひをり今朝いまだ庭に降りこぬ鳥憶ひつ」  
「この家に戦後生き来て老三人父逝きて残る妻の母吾の母」  
「風かよふ棚一隅に房花の藤揉み合へはむらさきの闇」  
「山の風吹きつゝるとき聲止みし峯のひべらし谷のひべらし」  
「藤棚の茂りの下の小室にわれの孤りを許す世界あり」

獨石馬 昭41・47(54・60)第八歌集

「君逝きし後も時間はとどまらず暮の面に龜裂は走る」  
「朝日さす梅の木の下土凍り楕圓に鳥の影走りたり」  
「笹青く茂れる山に嘖き出でて笹摩けつ奔る水あり」  
「老い初めしこの胸底の漠さをば何に喻へしうらに昔へんき」  
「ほむらだつこと無くなりてわが命夜半の渡瓶に音ほそほそ」  
「**老びとの増ゆといふなる人口にまのれ混つて罪の如し**」  
「勞働者深く憩へば頭垂れ炎立つもなく獨石馬のいじや」  
「胸の裡騒ぎてひとり思ふなり臘胸獸のいじやこつめへのか」

常臥に呆けたりといふわが母が案じ来るなり妻の母をば  
日の照らす膝の上より摘みたり落ちし髪の毛白く光れば

**忘瓦亭の歌** 昭48・53(61・66)第九歌集

去りゆきし少年時、戦時、壮年時、還暦一歳爾後の茫々  
現れて青く澄みつつ奔りゆく地下の水地表の砂を押へて  
すたれたる體横たへ枇杷の木のおき落葉の「ときかなしみ」  
喉乾き銃抱へつつ駈けてゐき六十一歳の夢の中にて  
**青ひて生くるならむと暮年の末に寂寥たるのみ我は**

感動といふべきや否容易き老の涙の「ときが走る」

曇る日の芝の上とぶ蜻蛉の細きは魂が逝きたる母の

「山鳩の昼鳴く聲を子の覺めて聞きゐたりしが不圖せぐり上ぐ」

「髯面を幼き孫がまじまじと見上げてゐしがべそかきそめぬ」

「弟の逝かむ日近し人生は將何なりや堅香子の花」

「花菰の咲く花のみが数へ得る白さにありて春の夜の庭」

「鬢よこし雑煮餅食ふ午過ぎのこの満足のあはれなる心」

「もの書きに妻がもつとも影響を與ふと言ひし正宗白鳥」

「家つつむ雨音を聞き目覺めをり行方も分かぬこの流離感」

「釋兒の「多電話より優々し羅」の「ことき聲よと思ふ」

「心より身より力感失せてゆきて人間一箇ベッドにぞ臥す」

「峽沿ひの日の影といふ町の名を旅人われは忘れがたくす」

「咳しつつ今日籠るなり年越しに子が貼りかへし障子の白さ」

「岸よりの日向の灘の海面に波うちあがる海礁かもあらし」

「この病氣癒して生きん徐々徐々に百歳までは生きん氣がする」

「わぎのちや吾が先長し白秋ののちなる歌を創りかゆかん」

「静かなる心を欲りてこの夜ふけちさき朱蟬に燈をともしたり」

「物忘れしげくなりつつ携へて妻と行くときその妻を忘る」

「夜々にする耳の空鳴りベッドより口れ立ち上り頭をば振る」

「目覺むれば露光るなりわが庭の露團々の中に死にたし」

「窓ゆ入る夕べの光臥るなるわれをつつみて莊嚴すなり」

**大雪山の老いたる狐毛の白く變つてつらつら徑を行へんが**

「冬の夜の吹雪の音におびえたるわれを小床に抱きしめし母」